阿波安永実録 十六

貸本 [illegible]

へ 13
3362
16

世の中に米銭かくれぬものそんな
なまじしめてやぶれて来る
ものくるしみ

へ13 3362 16

本大學出版部

阿淡安永実録後巻の拾六

目録

一 土佐守家老後藤書佐の
太之進が悪行を語り手代追放の事
一 佐野太之進伊豫の令治り
鎬き儀郎の事

阿淡安永実録伝 巻の拾六

去依中座家老福島玄依佐野
大之進ゟ役行を語り出事 進殺の事
佐野大之進仮縁の為に語り続き
議斗之事

明進六安永二年三月十五日福島玄
諸士代集め評議 以上佐野大之進 清
用の條申して有唯今営様まで下し

子達無世乃我の名大に進昇しらの後
我等その亀斗成就成宗し定て
これぞ其棟梁たるべし師と崇べきの
あつらいきぎ出弟子して諸士列座
の学りおのれが稽古書を出て
いろはや仮名大に進て方の先年精勤
の世川隣乃法範とするは御上も
法満足の忌憚なりし法恩深究り

且能く蒙成はじめ歴々の諸士亦是を
見る事を賞す師の手を空はる候賞美して
うらやミ見る家なり元来南國を移り
其をも遠近部田舎のち地方までも人遠て
御の川之方縁を明礼同志の身分
そして殿は勤切有らせよまわも志
ざる明誓同志のり法を百拍ある事の恩
縁と今之法義まで一家中の諸士

第神ハこそ神みち方に利根とさし
様の筆さへり致す時ハ家老若いるほど
はふ便をうけられ法窮無有盛
勢つよく大一家中の老若と不和ほし
て神ハみせ神ハと衛る時ハ夫を
庭気味よろしかるべし扨下方元根つのる
時ハ善く不忠の名を取事も有べし
猶りといへ共一家中の衛士人中ほを

方成徳るまじくいふ事是いたさん
所乃法威光こそも世儀を止難き人情
なりけり急部屋ふ川の土地がら
邪道ハ弁く素朝利害は云ふつめて
もとをく人中は徳りいふを止ぬ縁
て素使く思ふけ事打立て家
時之自体と恨する所理みつるいふ
を見て出んほ用ふなり候なり

ニ利銀減ありとも得ためなきぬさず候ぞ
人ぐちにのりやすく候てそれがし好
離れを知る事成其方には利害を従
学をもり勘素惜さるのみならずども
後の栄ひ母はく難し家国を
立退き方から観音とも刊て
行方へも仕官出世もなの候哉
浪難行やうもなく身都遍の忠孝

母仕官もんより件にて立退き身の安全
と極めて候ぞ行跡よりもたゞ人君に忠
誠を立て天命までも後栄あらん
らくもある道なり忠ゆゑからか素喜
方に無理の仕よう南出の立退べしと
いわれなく不便らく其業に下
たゞ家中の老若様々それ立派
意恨を交へても南也り仕官せらん

なりけるや恩海をも渡りし思ひも一家中
の老臣衆中して海を隔つ難をいとふなり
何事の為にもあらずよく／＼物外をたび
ともに利害を談じ忠節をとげすぞ
流石猛悪邪佞の大逆を乗ぶらひし
我慢頑礼のすがたとなる流血漂白の事
と行方へ難儀仕出して主従出世をと
人是非なくもの申さんと思ふ事なり

猶さ小姓をも取て幼年の者共より法
君縁を結り法親を浅くとも法を
一家中の奴共さわみさと住居なん
く川の志在つかふる耻かしくも斗り難し若
忠義を命かけて忠孝まもりひ志深
立してんのちしらぬ奴を法んより
是迄の行の世肉行は身く行方へも
立退き人年よりさき古地やうをもなく

繁昌やくそのうへに立身出世する通りし也
何事に付てもみづから福寿長寿にもなる
此ハ先祖より主君の御恩を祈り忠と孝
素より命を親よりうけて孝養仕りつき
身の骨のそれより是その御恩深き
ことり君の御恩報じ浅からず候とてこと
一家中兄弟情ある出世極之
志ある人倍す此は法の限りなき行時

もとよりやく商売を退散仕るべし然ども
素より其身の恩禮の深きを以て廻り仕ば常に
す者ハ身の為に手元の損を成すより損
領仕り世一毛寛宥に退散仕まじき事肝要
の第一之様に大切の返納仕るべし是則
常に其心得申すべく候それハ猶々能々
然るとてみやうかのおそれすくなからず
太切なる命の事なり然ハ能々心得

すべし。依一旦危難を救ひし勤功賞
せさんとて、褒美として是より田地の下しべく之
禄田の事は殊更に、今より子々孫々迄
いづし年々五六俵、諸役非法の作徳太く
年貢米定めにてあらしよ。此身ありてこそあれ
い其れを損なりし。今まで代官を押
いうれ退転しつゝ、今とハそこうのよう
しく威光を蒙く、諸役御偏行と

工ミ山し切てひろ万の利得を出さ
がりえんと思ひの外、急に召上られ、経
の秘をも取籠され、勢力を加へての如く
収納をとゞめて、下々へ退して猶も
浅ましき大きなる振舞之仕者当家を
仕度するハ、訴のはに候難者
座されも知らぬ事の趣をも改め、又
乃清身の上をも及ぶ座さ不可然や

智なかりかて陸奥代々武の福島家
ちやくと築が信悪乃縄を押へ君あり
諌言して智略を知らずし何の子細
ありしてか佐野大夫も代逼塞せし
妙年至願く時小勝の物を築がり
より逼網させ中にも延引れぬ当たる
たとへば流石徳無邪智乃佐野大
し逃と福島が謀略までありまと

月もすゝむ縁を頼む卿なりし卿にしく
てらんるよ殿人当世に行はれし礼を延て
退城しけり八講り悪徳と賢者の言
努者福島のてゝ深く味ふ所さき所政
れさる極りたりとの福島当書の談
年に殿入る百五十石の知行英大小百数
され共位せゞめ所領と逼塞せられえの所
礼儀し成く行はん家来ともさき弟の上

札弘く披露小来指してくるぬ乃
渡りたよふでく家より二百遠当し
我京都より五日足の体の土地のりよき人
貴段老人ゑらくいろく智弁とあぐらして
手前ゟ色を撫而立所ぁ世をせんとき毎
く工夫成立ししれ是ぞとも見ゆ手
ぅろしまくて宛月日を送りける勢
く古住の出来を扱も伊豫路にさし

かゝりければかのひよ悦び家に見ける仕の若生
なり若衆縁の者ありてやむなし
語をとりにならば旧縁も尋ずかしこ
ぅろやちをれくばまを使りて我のうへを
教ゆべし何方へ成とも取のこそ付成ける
聞くが立身出世其上の智略之しもがな
松年月をのはち其の所々にて我か生の
古地を出て我宿へ小いそりと寛も蔵より

ありし此老中を免じ伊豫の守松平
右京亮殿御用番していかりきかけり
けるしが又も作事奉行して右京亮
その継目を勤る六百石の人頭めく
宝暦の留守居に勤しが延享二年六月
十六日宝暦の種と出て行りし其年
株西宗にていし宝相給ふしく
さるく吟味も被下さしくる紀生

是らの様く其かへ目上の役人を逆むけく
此暇なり彼宝暦の当人作事奉行を
同役四人を不進放せられるを其川
彼大に進い終り当家なて海の據り
いぞられて親子三人つきて流浪し
ありそ後松平讃岐守殿にて言出て
来りし其かの目と家め思想の少輩役
より上りし又被用いられく松栄

悴をともなひ佐藤忠信につれて初瀬より
源平にて勝ち立て浄瑠璃
三百年をへて鉄砲組の頭
繁昌とも川と熟勘定方奉行役
まで勤め和殿の罪ありて宝暦年
中に遠州高松と申して阿州に
あり大吉つと名乗し其比太夫近
き事なり

此度ての正宗のかたなは
名作なく宝物なり手持正宗
とのふ実の正宗の弟子なく
打もち数て秘事は伝授におもし
（まことのなく弟子は数年刀
のあづちを手とし正宗その場
かぎりんを弟子ならぬのしるし数
を越なきへの弟子場のけんの

味とみんして然ともたりし
ゝる時まて蹴鞠へ手を家せけ
其六西家かた姫の事子かその
いりかみ鞠かつて遊ありしはあそ
西家飛鳥井の家の湯鞠へ入し方ニて
のたつしてを手段しかたりし賞
子孫のびしそ後てん何しあそて
西湯りけんと覚へかれハ行手

成て種の数を打出せし京家の
始ごと路作そて挿西家と世ま
是を稀す諸り秘事と親子
の中にても是をゆるさぬといえり
玄極り作卿大に遊てを松本ともある
後分伊藤の分た治りて家の家と分
成すもの人でも年久家まて四千余年
余りみもを多く事なれハ許な彼

父兄年足師匠を頼みて其のゆゑ
しかも万端の世話に預かり大いに進む
筆の時親子三人当座を退散せしめ
事なれば誰も人大いに驚き感歎せざるは
者なかりし手が上手に成りぬるはあらそ
これ大いに進み難き悦びて
此ころ世変り売物を活する者も
なく流石の大いに進みて当流もしてあれ

懐胎として寛永年中居くり
たくさんの今流つかひましてん御尤
いりせんと尚々紙くはへく見物を
並に能見所とつかはもの[illegible]
年ゆゑ小児三人相ひ乗てりとみえ
ふる大いに進み手ならひつゞき三人の小児
の中にて一番勝けるを常に敬ひ
たかりの小児成あり遠ひきあてさせ

川に突落し血まよひの息ハたえにけり
下河へ飛込彼小児を抱あげ大音に泣
流の川へ落たまへしと叫けり父上より
其親ハ隣家の者我もしくし越来り
是非なく太夫進ハ酒肴を投捨てぞ
何かわくく川へ飛込小児を助けり抱えて
小児をいふさき顔の紐へとかく身付
頭武へ行きて立寄て子の細と見れバぞ

太夫進ハさてこそ酒器続て我けふを尋り
かれ前々小児の川に落たりしに依て素
不思議へ引あやまり給ふべき事かけ小
児我け京を始り力からうずハ息ちおはげ
死すべきを我皆の通姻の印使善根こ
此きくけ小児の命を助たりけり貴
よろ親族の子成や親達り渡して安
堵さすあへし我子過去のえせよぞ

いふ道をいへる之と申ける諸く親をそろへ
け小児ハ琴所よりまの風情云て当時大
納戸役を勤る堀尾名左衛門といふ人の小
児成るていまき若衆にしせしハ夫婦
大よ打ふつき家来揃ふて付添来り
上をとふくて浄瑠璃しけり
然るに此小児ハ知る役を付られし
なれ共何事もてもすれとハまて

歌舞伎下女ならし小児成ハいかが形ひ出つくして
芸能よく此頃より評判となりて至る家
此本陰まくハ明けき新屋母く也是程
ひし大事の小児浄るいさせねハ見
物をせんかハ菊も知すも少しの
しみよふけるに下女歌舞の人情
なり今此小児をも其ていち此下女
いひけくゆつちまかせひして有つるん

さて又大進阿闍梨此よしを聞し三人
のかたりし小児の内に一両年綺麗なる
いかにもやさしき小児月若丸と
とのが内なる君は殊にあたり候人を
阿闍梨のかたへ返しまいらせ候也
さる程の若は大いに驚き[illegible]
候ほど[illegible]いか成因縁にて有り
つらんけれども命の親なり[illegible]

の因果なりけれは命をたすけられ
たり是も弘法大師の法恵に
かくし[illegible]一矢報[illegible]候
候ほとし[illegible]大進が手[illegible]
けるに大進[illegible]辞退の[illegible]
[illegible]先達[illegible]
稚児の若衆[illegible]遁[illegible]
しても小児[illegible]の[illegible]

せし帰敬しておこたらずして彼岸に到り
婦尾主婦よりあらはれて振子残るなり
中く因縁ところ光り輝きし家宅
の基根に附り名たかき大に進み手をとる
とく又其の一間に付ひ称にも及りては
遠長くの襟縁さらし療法
ふり雪るハ今の業方り志ざく
追善有りく縁道の名前古跡をあらく

一見行うし並経顔写方山の物語
り那どして被瑕れの有縁とこなり
中くて晴の骨むしれ八法急ず
中に雅礼回老ことば無き骨拾りけり
すいかり人親そてかの家貧具の業とを
し給や先世追善ころ者親り離れ
妻子にて非世浮世にかへて如き身の
為んしして菩提供すれ追善佛果の為

に廻生して善悪根のいんを察し
修行するは是浮世のならひと離れ世を
すて人のなる業之法道の習ひに中
く世とて人をも傾くる法具の業
とも云伝へり行ずあらましき事なれ
子細にいかなる尋ね求ば太く近き中に
釈とふてみるに心を聞と流して法ふ宗の
上人を行とる隠しかへきに之を事も武

の家に生れ君に忠義をつくし立身
出世をしたきは身の謙信行曲の為にさるを
さすれ是を我が立身出世の邪ナ
とせられ寛平宮家り満てたる芸
此因果にて行りつる武士の冥利に
云ふりし天罰は刺れてん今に発心
して四国廻を仕りせて父母の菩提
をとむらひ妻子代々をりふりて

窮屈なる旅の辛労をしてすら潤ひ
それに拘りけり是ハ久しき夫路のかたち
なりをみせて流しける世をへたるすき
ものゝ有様ハおのつから滑稽を秘かなる
隠人の居は浮世を放れ陀礼同老のおも
捨てゝ侍り花を集て何か名木を埋む
となさんるに散念至極のしるへ人あれ
十が盛りなりけりいかんぞ盛りと称するなり

陀礼同老の有様すそ東西をかれし
菊家ハ是何か三方ある老小さなれば
家元を化家なりしかとも法道今より
人々を分ち千菊家なり仕居のしかし
何らかよ係しなり揖厭吹寡なりして
遁世と名乗之し禅んの心よ揺ぐめ
それより是へ大に進んて禅道の宗意を
何ほとし侍り千歳鶯入りけるに法の切

の前中にて我等く武運を嫁ひ願ひ付

者をも好み給ふ心さまたりしや武士の

冥加にもつきて立身出世もかなはし

只此のうへに徒ら輪廻して後には当家道

世しく浮世を請まよひ身を行んするして父

母の菩提を弔んとかかる之道理にて

しても速かに六道の輪廻の苦患も遠く

去りてしいかに聞きも人の慮をもされハ

年より足腰よはく老の身なれば

いまた盛りの骨柄にて精力つよく息

さんとて事に足をふ兵又は子の

命は親にくわしりて親の手まへの

くおりてあれハ只今当家に

仕ふべしとて主君の御恩をかうむ

否の奉公実けりとて速に御略歩を

尚り備ありて我子の命は親に只今ほ

りそおしも浅草寺の節ゟ如く
名高き玉姫無理ならず押当る本大し
進今ハせん方なき栗りも〳〵
くれぬ間に皆かく〳〵名く左程り
若葉しらぬ事は共に是非なき事と成
更き燭桐にて行ん独ふ定めて随ひ
先志しくし便足独にて起立て根付く
なりとて志くしく着不止り人言を得ひ
中

貸本 佐吉屋 卯兵衛

終

りそおいハ浅草寺あま三行
便足沢山なる
燭桐自己
六条
ん